思わぬハードル

第1稿

井上ゆうき

2025/04/15

＜登場人物＞

山川二郎(18)　…主人公。

カメ　　…山川二郎に助けられるカメ。

浦島太郎(24)　…漁師。

○海岸・砂浜

波の落ち着いている海岸線。
山川二郎（18）、釣り竿と魚の入った網を持ち、海岸を歩いている。
遠くから何やら騒がしい声が聞こえてくる。
二郎、目を向けると、数十メートル先でちびっ子3人が1匹のカメを蹴っていじめている。

二郎　「おーい！何してんだお前ら！」
二郎、ちびっ子たちに向かって突っ込んでいく。
二郎　「3人で1匹をいじめるのは卑怯だろうが、離してやれ」
ちびっ子、カメから離れ、走り去っていく。
二郎　「（カメに）大丈夫か？」
カメ、蹴られた際に体にかかった汚れを払いながら。
カメ　「ああ、おかげさまで助かりました」
二郎　「いやいや、怪我がなければ何より。次またやられたら、俺がやり返してやりますよ」
カメ　「本当にありがとうございました。名は何と？」
二郎　「二郎だ、山川二郎」
カメ　「二郎殿。この恩は必ずやお返しさせていただきます。では」
カメ、海に帰っていく。
その後ろ姿を見ている二郎。

○二郎の家・居間（夜）

母親と夕飯を食べている二郎。
母親　「あんたそれ、竜宮城に招待されるんじゃねえか？」
二郎　「え？」
母親　「この地域の言い伝え知らんの？海の中に生き物の仕えている城があって、そこにとんでもねえ美人の姫が住んでるって」
二郎、想像してニヤけながら。

二郎　「へえー、どんくらいの美人なんだろな」
母親　「知らん。けど、あんたには釣り合わねえくらいなのは確かだろうな」
二郎　「やかましいわババア！」
　二郎、ムスッとした顔で白飯を口にかき込む。

○海岸・釣り場の岩山（日替わり）

　二郎、釣り竿を海に垂らしている。
カメ　「二郎殿ー！」
　二郎、声のする方を向くと、カメが海から顔を出している。

○同・砂浜

　二郎、海の水で草鞋を洗っている。
カメ　「先日は大変お世話になりました」
二郎　「いやいや。で、今日はどうしたのよ？」
　二郎、気にしていない素ぶり。
カメ　「実は、二郎殿を竜宮城へお連れしなさいと姫からのお達しが出ておりまして、このたび城に招待させていただきたく」
二郎　「ほう、竜宮城かー」
カメ　「はい、来ていただいた暁には、我が城自慢の料理をご馳走させていただきます」
　二郎、大きく背伸びをして。
二郎　「それなら、少し行ってみようかな。美味い料理でも食べに」
　二郎、カメの甲羅の上に乗る。
二郎　「じゃあ、よろしく」
カメ　「え、ちょ、なんでしょうか」
二郎　「え？」
　カメ、体を傾ける。
　二郎、甲羅から滑り落ち転ぶ。

二郎　「何すんだよ！竜宮城行くんだろ？早く行こうぜ」
カメ　「それは承知いたしました。なので、明日から私と修行をしていただきたいのです」
二郎　「は？修行？なんの」
カメ　「呼吸のでございます」
二郎　「呼吸？」
カメ　「はい。二郎殿は人間様でございますので、私や他の海の生物と違い、水中での呼吸ができません。なので、竜宮城までの道中は呼吸を止めていただく必要があるのです」
二郎　「どれぐらい？」
カメ　「ざっと見て四半時（３０分）ですね」
二郎　「しは、四半時？！」
　二郎、驚いて。
二郎　「ふざけんなよ！」
　二郎、海に向かって走って入っていく。
二郎　「待ってろよ姫ー！今行くぞ！」
　その後ろ姿を真顔で見ているカメ。
　海に潜っていく二郎。
　陸から姿が見えなくなる。
×　×　×
　砂浜に仰向けで伸びている二郎。
カメ　「エラでもない限り、すぐに行くのは難しいのです、二郎殿」
　二郎、ため息をついて。
二郎　「わかった。わかったよ。やるよ修行」
カメ　「承知いたしました。では明日の未の刻（11時～13時）にて、ここでお待ちしております」
二郎　「あいよ」
　二郎、観念した顔で背中についた砂を払う。
二郎　「ちなみに、修行ってどれくらい時間かかるの？ひと月くらい？」
カメ　「そうですね。最低でも1年かと」
　次郎、激昂し、カメを思わず蹴り飛ばす。

二郎　「ふざけんな！期待させんなよ！スッと行かせろよ竜宮城！」
　蹴り続ける二郎。
　と、カメを蹴っていた二郎の足を、誰かの手が掴んで止める。
浦島　「やめておきなさい。いじめるのは悪ですよ」
二郎　「なんだお前、離せよ」
浦島　「君がこのカメをいじめないと言うのなら、離します」
　二郎、抵抗するが、片足を浦島（24）に掴まれているため、バランスを崩して転ぶ。
二郎　「わかったよ！離せ！」
　浦島、足を掴んでいた手を離す。
　二郎、その場から走り出して。
二郎　「見てろよこのクソ亀！」
　走り去っていく二郎。
　浦島、カメを向いて。
浦島　「大丈夫ですか？危ないので、しばらくこの辺りには近寄らない方がいいですよ」
カメ　「すみません。ありがとうございます」
浦島　「では、お気を付けてお帰りください」
　浦島、立ち去ろうと歩いていく。
カメ　「あの、すみません。名をお伺いしてもよろしいでしょうか？」
　浦島、カメに振り返って。
浦島　「太郎です、浦島太郎」

（終）